

3. 城郭構成要素の変遷 ～城館編年のための基礎作業～

はじめに

中世城館は、様々な要素が複合的に絡み合って一つの形をなしている。さらにそれらは、築造当時の姿の上に時間の経過とともに修築、改変などにより様々な要素が加味され、さらに城館の使命の終焉とともに意識的に破壊されるか、または崩れるに任せてその姿を変えていくことになる。

このことは、例えば一度きりの焼成によってその姿が決まる土器と比較したとき、いかに城館を時間軸上に位置づけるのに困難を伴うものかが想像できるであろう。しかし、歴史的なモノは正しく時間軸上に配置しない限りは、そのモノに対して歴史的評価が十分に与えられないのは言うまでもない。⁽¹⁾ 最近の中世史研究の飛躍的深化に歩調を合わせるように、城館研究でも「地域論」、「権力論」などが注目されているが、やはり基本である城館年代決定論の深化こそが、城館そのものの正しい評価を与えるものであり、城館から見た社会論の構築には必要なものであろう。

ここでは、先ず原点に還って城館そのものの編年にあたっての基礎的な作業を行った上で、幾つかの城郭についてその遺構の変遷を考えてみたい。

個別要素の出現年代とその変遷

大分県の城館において、城館を構成する要素の内、地表面観察で確認できるものをすべて抜き出してみると次のようになる。それは、平坦面（曲輪）、切岸、堅堀、畝状堅堀、横堀、堀切、土塁、石垣、石塁の9つの要素である。すなわち、僅か9つの要素の組み合わせですべての城館が表現できることになる。その要素をどこに配置するのか、あるいはどの要素とどの要素を組み合わせるのか、長さや形、幅、高さはどうするのか、数は幾つ配置するのか、といったことから城館を作る対象である自然地形の起伏を勘案しながら決定していくはずである。では、同じような地形であれば、必ず同じような城館が出来るかと言うとそうではない。その際、当然ながらその当時の戦術を反映した作りになるし、流行、技術的な裏づけ、あるいは築城にあたっての動力力や家臣団との関係といった事柄が反映したものになってくるので、ほとんど同じような城館は無いと言っても良い。

では、これらの城館を構成する各要素について、主に文書資料と各城郭の縄張り分析、さらには発掘調査の資料などによりながら個別にその出現年代と変遷を押さえていくことにする。

（平坦面と切岸）

平坦面は曲輪として利用するとともに、崖面を切岸として利用することにより防御面も担っていた。曲輪回りの斜面や尾根の斜面を登ってくる敵を防御するために、階段状の平場（曲輪）を幾段も築き、斜面の傾斜を急にした。おおよそ、主郭の面に比べて20から30mほど下まで加工が見られる。高城や立石城、野上城などが典型的である。これらの城郭には基本的に堀切が存在しないが、高城では尾根上の階段状曲輪の下に堀切が一条あるものの、通例の堀切のように斜面に貫通しておらず、片一方は等高線に沿って回り込み、帯曲輪を形成する。これは堀切の機能を十分に発揮したとは言えず、その初現形態といってもよいだろう。

発掘調査された瀬戸遺跡は、13世紀前半から14世紀前半の館城的な施設であるが、沖積地からの比高差が50mほどあり、切岸で約50m四方に画された主郭と、それを取り巻く帯曲輪、さらに傾斜のきつい尾根には階段状の平場が形成されていた。この例からも、この段階では尾根部の処理にあたって、堀切よりも階段状の平場が用いられていたのが分かる。

一方、佐田城g曲輪群の斜面にも同様の階段状の平場があるが、片側に堅堀があり、平場のみに比べて防御性が一段と高まっている。立石城も同様である。佐田城が15世紀末の「佐田山所々御陣」に相当するならば、それより古い形態を示す高城や野上城などの単純な階段状平場の形成は、直接構築を示す史料はないが15世紀末以前に遡るとすることができるであろう。

また、もう一つ平場で特徴的なものに、主郭回りを取りまく横堀状の帯曲輪がある。亀城や雄牟礼城、帆足城、鹿鳴越城などで見られるもので、雄渡牟礼城や鹿鳴越城などは明応段階（15世紀末から16世紀初頭）ですでに機能しており⁽²⁾、これらの横堀状の帯曲輪がこの段階で存在したことが考えられる。前述の瀬戸遺跡も50m四方の平場の周囲に帯曲輪状の平場が巡っており、同タイプと思われる。そうすれば、山頂部から幾重にも腰曲輪を造るタイプと、帯曲輪を1回回すタイプのものが同時に存在していたことになる。

（堅堀）

天文年間に玖珠郡の在地土豪等に出した大友義鑑の書状に「角牟礼新堀之事」とある。これは、その前年に筑後、豊前方面の押さえとして大友義鑑が平井左衛門尉を「城誘奉行」に任じて造らせた具体的な内容を示すものである。角牟礼城には堅堀以外の堀は無いので、「新堀」は堅堀を指すと考えられる。そうすると少なくとも16世紀第2

四半期には確実に堅堀が存在したことになる。⁽³⁾ この堅堀は、虎口付近で東側への回り込みを防ぐために掘られたもので、同様の機能を果たしたと考えられる堅堀は、他のいくつかの山城で確認できる。

下毛郡に位置する馬台城には虎口付近に2本の堅堀が入れている。この城は16世紀前半、大内氏の豊前支配の拠点の城郭として妙見岳城とともに機能していたが、豊前が大友氏の支配に移ると馬台城は役割を終えたと考えられる。すなわち、16世紀前半代の遺構と考えられるのである。同時期に機能した妙見岳城を見ると、一見南側斜面には多くの畝状堅堀が施されているように見えるが、曲輪直下に始まる畝状堅堀群と、堀切に伴うと考えられる堅堀群とに分けることが可能である。後者の堅堀群が馬台城などと同様虎口周辺に伴う堅堀であるとする、この部分の構築は大内氏の手による15世紀末ころからの城誘に伴うものである可能性が高い。なお、畝状堅堀と堀切の評価については後述する。

大友氏の本城である高崎城は、18条の堅堀があるが、虎口周囲にありお互いの間隔が広い一群は堅堀群と解釈するのが適当である。そうすれば、その一群の堅堀は、少なくとも16世紀代でも早い段階で構築されたものである可能性が高い。

佐賀関の烏帽子岳城は、虎口に近接すると思われる位置を中心として5本の堅堀が見られる。この城は、永禄年間に大友宗麟に許されて四国から豊後に戻った佐伯惟教が築いたとも言われており、この堅堀も永禄年間の築城である可能性がある。⁽⁴⁾ 更に、鹿鳴越城は天文3(1533)年の大群山合戦時に「城誘」がなされたが、明応年間にはすでにその存在が明らかであり、複数回の改修が想定できる。中でも堀切から連なる堅堀の発達は顕著でこの城の特徴となるが、やはりこの初現は天文期の改修になるものであろう。

また、屋山城や小岳城、鶴ヶ城などは、畝状堅堀と一体となりながら、虎口への通路を狭める目的で堅堀を巧みに使用しており、さらに時代が下るものであろう。これらは屋山城が天正7年の「要害誘」とあり、他も天正14年からの島津氏豊後侵攻時に機能していた。よって、この虎口付近の堅堀は天文期から天正期にかけて曲輪との連携を深めながら、虎口の明確化とも相まって技術的進歩を遂げた考えられる。

また、堅堀でも虎口とは別な個所に掘られるものがある。それは、平坦面のところで記したが、立石城に見られるように尾根に階段状の平場を形成し、片側(基本的には外側)に堅堀を入れるものである。同様の堅堀は、佐田城のgの曲輪群や高旗城の東西の曲輪群、天面山城などに見られる。妙見岳城のIの曲輪群からIIの曲輪群に下る土塁を伴う堅堀もそうであろう。⁽⁵⁾ ところで、尾根部を階段状に加工し防備する技法は、前記のように野上城西曲輪群や高城などに典型であるが、これらには堅堀が伴わない。しかし、野上城の西側に伸びる尾根は、その北側に城道と考えられる長い帯曲輪を持ち、高城も南側に伸びる尾根の先端部には長く帯曲輪を巡らせている。これらは、尾根に沿って下る堅堀の初現形態とも考えることが出来る。堅堀を伴う佐田城の遺構が15世紀末の「佐田山所々御陣」に相当するならば、この段階で尾根線を縦に下る堅堀が出現していたと考えられる。しかし、この堅堀は尾根を階段状平場で処理をしなくなるようになると用いられなくなる。

以上のように、堅堀は二つの系譜があり、尾根上の階段状の平場に接して下る堅堀は15世紀末には出現していた可能性があり、虎口周囲の堅堀は16世紀前半代には出現していた。そして、特に後者は後に出現する畝状堅堀などと組み合わせられながら、虎口に至る通路を狭めるために曲輪との関係を深めながら、天正年間にかけて巧みに配されるようになっていく。

(畝状堅堀)

畝状堅堀は現在大分県内で24個所の城館で確認している。まず、その形態によって分類するのが一般的であるが、ここではこの遺構が16世紀代に限定されたものであるという前提の上に、地域の歴史的状況からその出現年代に迫ってみたい。

豊後から豊前南部にかけての地域における緊張時期にはいくつかのピークがある。16世紀後半に限ると次のようになる。

まず、豊前南部を見ると、弘治3(1557)年に大内氏が滅亡するとともに、大友義鎮は豊前、筑前方面の支配に乗り出し、永禄2(1559)年には豊前、筑前の守護職を手に入れる。こうして、九州北半を押さえるが、すぐに周防の毛利氏が九州に侵攻し、北部九州は混乱する。さらに永禄5年には豊前南部にまで侵入し、大友義鎮は府内から臼杵の丹生島城に移らざるを得なくなる。元亀2(1571)年に毛利元就が死去するまで混乱は続くが、その中で大友氏は永禄2年に妙見岳城の「城誘」を行い、鹿鳴越城の守りを固めるなど、府内から見て北部方面の防備を厳重に行っているのがわかる。

引き続いて豊前南部では天正7(1579)年頃、広範に緊張感が高まる。その中で、大友義統は「屋山要害誘」や妙見岳城の「普請」を、そして「鞍懸要害」の城番を堅固に申しつけるなど豊前、豊後国境付近の城郭に対して守りを厳重にすることなどを促している。この動きは翌天正8年の田原親貫の乱となって現実のものとなり、さらに翌9年には大友宗麟による宇佐宮焼き打ちがあり、天正11年頃まで豊前南部の宇佐郡と下毛郡は騒乱状態となる。それに対して、大友氏は天正7年頃から在地土豪の小規模城郭を「切寄」として直接掌握する動きにで

る。⁽⁶⁾

以上のような状況から考えると、妙見岳城や立石城、烏帽子岳城、屋山城、日指城など豊前、豊後国境に集中的に展開する畝状堅堀は、天正7年前後に構築されたものである蓋然性が高くなる。その場合に、畝状堅堀の形式に差があるのは、元もとの城郭の型に規制されたものであり、時期差を示すものではなかろう。例えば、烏帽子岳城などは主郭との関係が明瞭で、城郭プランの中で当初から想定されていた位置に施されているように見えるが、屋山城や立石城、妙見岳城などは後から弱い部分に追加したように見える。⁽⁷⁾

一方、天正9(1581)年に豊後西部の筑後国境に位置する高井岳城の城誘を問注所刑部大輔に命じるなど、やはりこの頃からこの地にも豊前の動きと連動した騒乱状態が生じてくる。高井岳城にも畝状堅堀があり、この時の構築であろう。また、財津古城にも畝状堅堀があるが、この構築が文書上の「財津讃岐入道所宿誘」に相当するならば、やはり天正10年のこととなる。

日田からさらに上流に上った玖珠盆地周辺にも畝状堅堀が集中する。ここは、筑後との緊張関係で出現する理由に乏しいが、豊前の動乱がこの地と境を接する下毛郡に及ぶようになると、やはり豊前、豊後国境地域として大友義統は玖珠郡衆に対して、備えを怠らないように伝えている。これは天正9年のことであり、この地も日田と同様、豊前南部よりやや遅れて畝状堅堀が採用されたと考えられる。

また、豊後中枢部(府内、臼杵)以南に点在する畝状堅堀は、天正14年からの島津氏豊後侵攻に係わる構築であると考えられる。この南部地域は、16世紀後葉の天正14年以前には基本的に地域を巻き込む大きな戦乱の舞台にはなっていない。そのためか、この地域では大友氏が直接城誘を命じたことを示す文書はない。一方、地域の拠点的城市に畝状堅堀が見られることからすると、大友氏が豊前南部から豊後北部～西部の在地で「〇〇衆」などに命じた「城誘」と異なり、天正14年の島津氏侵攻に備えてある程度自立的に構築、改修したことが考えられる。⁽⁸⁾

以上、畝状堅堀は地域を巻き込む戦乱状態の中で地域的にまとまって出現した可能性が指摘できる。その中には院内から山香、さらには玖珠郡にかけての豊前・豊後の国境付近がもっとも古く天正7年頃、やや遅れて筑後境の日田地域で天正9年頃、その他の南部地域では天正14年の島津氏侵攻に備えてに構築された可能性が考えられた。

(横堀)

横堀は、考古学的な発掘調査によって14世紀代の「ふいが城」で確認されている。発掘調査前の状況でも横堀は明瞭に確認されており、かなりしっかりした直線的な横堀である。しかし、この横堀の系譜やその後の展開は不明である。⁽⁹⁾

豊後から豊前南部では横堀を有する城郭は少ない。まず、部分的にでも使用した城郭をあげると天面山城、御所の陣、小城、松牟礼城、佐田城の各曲輪群、副城、高井岳城、吉広城、甲ノ尾城、坂手隈城、日指城、高森城、山本砦、山本切寄、高山城の15城となり、その内5城に畝状堅堀が伴う。その5城の畝状堅堀はいずれも横堀と密接な位置に掘られており、同時期に構築されたものと考えられる。即ち、天正7年から同14年にかけてのものである。

その他の城郭では、御所の陣が天正8年、天面山城は天正14年と考えられることから、概ね横堀の構築、使用は突出したふいが城を除き天正後半期に限定できるものである。特に、高森城と山本切寄、高山城は、横堀に折れ(横矢掛かり)を持ち、櫓台状の突出部を持つなど共通点が認められる。高森城が天正16年に宇佐郡に入った黒田利高の築城と言われており、それが事実であれば他の山本切寄や高山城もその支城として構築されたことが考えられる。

このように、横堀は鎌倉期からの伝統があるが、城郭の防衛ラインとして主体的に用いられるようになるのは天正期後半代と考えられる。

(堀切)

堀切は、尾根線の防御を階段状平場とともに担う施設である。しかし、この両者が共存する城郭は少ない。

高城には主郭からかなり下った地点に階段状平場に伴って堀切がある。この堀切は両側の斜面に堅堀として下らずに、斜面を回り込んで帯曲輪につながる。これが15世紀末以前に出現したことが想定できたが、このように尾根線の防御を階段状の平場と切岸が担い、その後堀切を入れるようになったとすれば、主郭から離れた地点に堀切を入れる事はその名残と考えることもできる。津賀牟礼城や榎牟礼城、山の城などの城郭は、主郭から遠く離れた尾根筋を幾重にも掘り切るという共通点がある。⁽¹⁰⁾

一方、このように尾根の遠いところを掘り切るものとは別に、曲輪に接する部分に堀切を施すものがある。屋山城、佐田城、岐部城、成仏城、御所の陣、龍ヶ鼻城、日指城、城の越古城、田附城、高井岳城などである。これらは、尾根部に階段状の曲輪群を設けて防備しようという発想から抜け出し、曲輪回りをコンパクトに守ろうという意識が見て取れる。屋山城は天正7年に「要害誘」、高井岳城が天正9年に「城誘」、龍ヶ鼻城が天正9年

に三ヵ年の城番で感状があるなど、総じて天正期後半代の城郭に認められる。

すなわち、前者から後者への変遷が認められるならば、16世紀前半代に曲輪から離れた尾根の先のほうを掘り切る堀切が出現し、天正期後半（16世紀第4四半期）には曲輪に接する部分を掘り切るようになっていったものと考えられる。

（土塁）

土塁にはいくつかのパターンを認めることができる。一つは佐田城や副城などのように主郭の周りをしっかりと高さを土塁が囲むもの。これは、横堀の出現と軌を一にするものである。一つは低平な土塁が曲輪の一部に認められるもの。そしてもう一つが曲輪の片側にのみ比較的高い土塁を持つものである。この3番目の土塁は地域性が明瞭に認められるもので、いわゆる「南郡」と呼ばれる大野郡の城郭に特徴的に認められる。

松尾城、荒平城、烏岳城、烏屋城などにあり、状況から判断して削り残し（削り出し）で土塁を造っているものと考えられる。つまり、平坦面を確保するために山頂部全体を削平するのではなく、片側のみ掘り残す事によって頑丈な土塁を確保したものである。なお、杵築の竹の尾城にも類似の土塁があり、関連が考えられる。しかし、今のところ、この種の土塁の年代を想定できる資料が無いが、天正期にその使用が確認される城郭にもあるので、使用の下限は天正期に求めることができる。

（石垣、石塁）

最も特徴的で、突出した存在でもある長岩城は、まさに石垣と石塁の城である。この城での石の使用は二つに集約できる。すなわち、主郭回りの石垣と、塁線としての石塁である。石積みは板状節理の安山岩（山に転石として無数に散在）を単純に小口積みにしたもので、高さは2mほどが最大である。これに類似した石塁は雁股城などに認められるが、基本的には石材の有無に左右されるものであり、石垣技術として広く広まるものではなかった。

その他に石積みの認められる城郭は、佐田城a、e曲輪群、矢部城山城、光岡城などで、いずれも天正期後半以降のものと考えられる。

城郭の年代決定について

前節では城館の個別要素について出現年代と変遷について述べてきた。ここでは幾つかの城郭に焦点を当てて、その変遷を具体的に見ていきたい。

文書上で複数回の改修が確認できる妙見岳城を見ると、最高所を中心として、四方向に伸びる尾根線上の平場を曲輪として利用し、斜面部に堅堀を施すことによって防御ラインを形成し防備を固めるというのが基本的な縄張り構造の城郭である。それを個別の要素に分解して見ると、まず、最高所から階段状に曲輪を配するという15世紀代の手法があるのがわかる。さらにこの階段状の曲輪群の横には一部に通路状の堅堀が確保されており、15世紀でも終わりに近い構築が想定できる。階段状の曲輪群のさらに先に堀切が何重にも掘られているのは、16世紀前半代に入ってからのものであると考えられ、それには主郭西側の堅堀群が伴うものであろう。そして、天正7年前後には尾根先端部の曲輪を守るように畝状堅堀群が掘られるのである。つまり、大内氏から大友氏と築城主体が変わっても、当初に形造られた基本的な縄張りは変わることが無く、弱い部分に新しい要素（技法）を採用することによってより頑丈な城郭に変えていったと解釈することが可能である。この妙見岳城は、文書では明応8（1499）年に大内氏のもと宇佐郡院内衆が同心して城郭を拵え、永禄2（1557）年には大友氏が宇佐宮社領などへ「城誘」の負担を命じ、さらに天正7（1579）年には田原氏が差し籠って普請をなしていることがわかる。この文書で確認できる3回の築造、改修が三段階の遺構の変遷に対応する可能性が高い。

次に明応段階（15世紀末）に構築されていた佐田城を見てみると、ここは6カ所の独立した城郭の集まりであるが、特にbとgの曲輪群には階段状の平場群がよく残り、15世紀代の構築であると想定できる。g曲輪群には尾根上の平場に伴う堅堀が下り、15世紀末の指標と考えたものである。さらに、全体的に独立的な堀切の多用は認められず、cやe、f、gに認められる堀切は横堀と連結するなど新しい要素があり、これらはいずれも天正期に一斉に改修がなされたものと考えられる。中心のa曲輪群は、更に一段とグレードが高いが、同時期の改修であろう。このように、佐田城の変遷は、徐々に改変が加えられていったというより、古い城郭の上にある時期突然と改変の手が加わったと見る事が出来る。そして、外見上（曲輪回り）はまったく別な城郭に造り替えられたのである。

次に、文書上は「改修」の文言は確認できないが、南北朝期から大友氏の持ち城であった高崎城を見ると、基本的には尾根を階段状に削り出し曲輪群を設けるもので、現在見る事の出来る遺構の基本的姿は15世紀代には成立していた可能性が高い。さらに、その曲輪群の南側には「城道」として機能している堅堀があり、妙見岳城や立石城、佐田城g曲輪群などと同時期の15世紀末段階の姿をとどめている。しかし、本来であれば階段状の曲輪群で繋ぐべき主郭aの部分と主郭bの部分の間に大きく自然地形を残している。これは、主郭a部分の特異性にその要因があると考えられる。すなわち、主郭aは主郭bの西にある堀切により、それより下位の曲輪群と厳

密に区別される存在であったということである。そう考えれば、主郭aから東側に展開する曲輪群は、一連のものとする事ができ、初めて全体的に古い様相を残していることが頷けるのである。そして、16世紀前半から中ごろにかけて虎口部周辺に堅堀群を入れ、東側に回り込まれるのを防ぐ手立てをする。更に、天正期には一番弱い東側の尾根の先端部付近に畝状堅堀を施すのである。

おわりに

以上代表的な3つの城郭を例として取り上げ検討を加えたが、いずれも発掘調査で確実に年代が押さえられているわけではない。改修を重ねて古い遺構を壊す場合は発掘調査でも年代が押さえられない可能性もあり、基本的には単相の城郭の年代を押さえることの積み重ねが、改修を重ねた城郭の変遷を読み解く鍵になるであろう。その意味で、個別小規模城館の持つ意義は大きい。(小柳和宏)

註

- (1) 千田嘉博氏による織豊系城郭の虎口編年が、城館研究に飛躍的な進展をもたらした事を見ても明らかなことであろう。
- (2) 雄渡牟礼城は更に南北朝期に遡る。
- (3) この角牟礼城は、後に織豊系城郭に改変されており、当初の姿が不明な部分が多いが、堅堀は基本的に最終段階まで機能していたものと思われる。しかし、その堅堀の築造が文禄期にまで下ることはないので、おそらく天文期のものであろう。
- (4) 堅堀が曲輪との関係を強めて入れられており、単独に近い馬台城や高崎城など比べて新しい要素と見ることができる。
- (5) 高崎城の曲輪群の南側にある城道などは、これらの発展形態と見ることができる。
- (6) 「切寄」という用語は天正7年以後に新たに造られた、あるいは、まったく別な城の改修された城郭、または防御的な集落を指すと考えられるので、この時期、面として戦乱状態が継続していた豊前南部の特異性を見ることができる。
- (7) 烏帽子岳城の構築年代を示す文書はないが、この時期に新たに造られた城郭と考えられる。また、立石城は主郭からかなり下った階段状の曲輪群の下に畝状堅堀が入れられており、一見すると古い畝状堅堀に見えるが、これは城郭の型が古いのであって、そこが一番弱いと考えられた部分に畝状堅堀を施した、と考えられる。
- (8) 畝状堅堀を有する府内に近い小岳城、鶴賀城、水ヶ城は、それぞれ清田氏、利光氏、臼杵氏といった大友氏に近い一族の城郭であり、大友氏の高崎城や丹生島城と一体となって豊後領国防衛の最終ラインとして機能していた。また、南郡の津賀牟礼城、松牟礼城、高尾城の畝状堅堀は天正期に機能しており、宇目の駒鳴砦は島津氏侵攻に備えて岡城の志賀氏が入ったが、ここにも小規模な畝状堅堀が見られるなど、天正14年の島津氏豊後侵攻が契機となって南郡の国人クラスの大友家臣が主体となり築いたのは間違いないと考えられる。
- (9) 伐株山城の麓にある丘陵上の陣ヶ台遺跡では、13世紀代のやや湾曲する溝が確認されている。比高差90mほどの丘陵上で、しっかりした溝が巡ることは注意される。
- (10) これらの想定される城主が入田氏、佐伯氏、朽網氏といずれも16世紀前半から中ごろにかけて大友氏に反旗を翻した一族であることが興味深い。言われるように、これら半ば独立的な家臣団の自立性の高さが、大規模で、かつ防御に重点を置いた城郭を生み出していったエネルギーであったとも言えるであろう。